

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和2(2020)年  
**10月号**  
通巻602号  
毎月23日発行  
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和2年10月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)45-1192  
★印刷 大倭印刷 監修  
★定価 1部 300円  
年間購読料3,500円(送料共)  
★郵便振替 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamato.jp>



旧海軍航空隊跡地の「特攻碑公園」にて (鹿児島県出水市) 屋久島 手塚賢至さん撮影 (文・4頁)

**再録** 昭和44(1969)年10月23日発行『すさのお』第37号より

## 日置神奈備に詣り、土着信仰を説く

法主 矢追日聖 (満57歳)

### 御霊鎮め

#### 法主寸言

神ながらも  
一人個人の  
生命だけでなく  
一つの民族の  
生命にも流れている

昭和四十三年七月三十日、和歌山県西牟婁郡日置川町(現白浜市)日置、川口良夫氏の依頼によって、大倭で御霊鎮めを行った。ということは彼の家では難病やその他不幸ことが多いので、彼は何か人間では分からない原因でもあるのではないかと常々苦にしていたようだった。大阪で商売をしている楠本常次郎氏の奥さんの実家が川口家で、良夫氏はその実兄に当たる。そうした関係から楠本夫妻のすすめによって川口氏は大倭へ来られたといういきさつだった。

観たところ川口家にも固有霊とのかわりはあったが、この時、それに関連性のある多くの固有霊が出現した。私は現地の実状は知る由もないが、その固有霊の多くが天狗霊であり、神社の雰囲気をもっていたので、私は近き将来必ずその神地へ詣ることを約束しておいたのである。

## 日置へ

待望の日が訪れた。昭和四十四年九月十六日、秋晴の爽やかな天気恵まれた。正午近く大倭を発った。車は快適に走る。南紀の浜は特に美しく見えた。樫へ二キロ手前がある袋谷トンネルにさしかかった時、日置の龍神が迎えにきた。車を止めて路上に出る。

午後五時四十五分、袋のような入海から見る水平線は夕映一きわ美しく、ピンク色の薄雲は水平線を等間隔で横に一線を強く引いていた。頭上には黒雲低く垂れこめて、パラパラとおしめりがこぼれる。日置は直近にありと感じた。

十五分後、志原海岸にある国民宿舎「ふるさと」に着いた。川口一夫、楠本常次郎の両氏が待ちわびていた。

この夜、宿舎から東南約二キロ、日置の川口氏宅での教導を終え、帰途日置川の右岸を走った時、古き木立から天狗達の挨拶があったので、ここがその拠点であることを知り、明日詣ることを約して別れた。

## 古代の祭祀の場

約束通り詣ったそこは、この地の氏神さんで月宮神社と言う。通称は日出神社である。楠木の古木など林立して神々しい。本殿には何も無いがその右手、鳥居があって階段のある岩盤の所にこの神地の主体霊があった。

ここに愛宕神社及び須佐神社という可愛い社祠が置いてあるが、これは古くから鎮まるこの人格神とは無縁のお社である。

久し振りの対面だったので神域をあちこち逍遙

しながら、四隅に座をもつ天狗さんにも懇ろにねぎらうておいた。

主体をなす岩盤は、昔は日置川右岸の先端にあって大海との接点だったようだ。今はその中腹が削られて道路になったが、川の中には少しばかりその岩根だけが残っている。古代の人はこの清らかな流れで身を清め、この岩床の上で神祀りをした。つまりこの神社は古代の祭祀の場であった。

その祭祀のご神体は此処から北三百メートルの地点に在る円錐形の小山で、これが日置の神奈備である。日置川の川口近くに住みついた古代人は、阪本、安宅、大野、大古等に居を構えたが、歳々の洪水等で土砂が川口に集結して、神社の南に三角の陸地ができた。日置の町はここにある。

最近まで月宮神社から神奈備の山まで古木が生い茂っていたようだ。この神地の古木で船を造ったところ、その人はたちまち海で遭難したという古老の話も笑いごとではない。

日置の神奈備には海の龍神がこの山をヒモロギとして棲まい、船出には必ず神地の岩盤上でお祈りをした人々を守っていた筈である。陸の孤島のようなこの地方で、太古住居していた人々は全て海を利用した。

## 霊界人の気持

そうした時代にあつたはこの神奈備に祈ることが生活上重要な行事であった訳だが、現在は僅か古代人の禊場であったこの地を神社として、細々ながら太古の面影を留めているに過ぎない。この地方に住む人々の中に、彼等の大先祖達が命をかけて信仰し、子孫の繁栄を乞い願ったその真心を、肌で感じとる者がどれだけあるであろうか。寒心に堪えない。

この実感は月宮神社へ詣った時、あちこちに在る固有霊からくる嘆きの訴えであった。胸がつまり涙がでた。

この日、田谷圭造氏宅、及び、夜は森田清一氏宅を教導の場に当てられた。参加した土地の人々に對し、日置の神奈備と月宮神社の関係を語り、この地の固有霊の想念を不十分ながら伝えておいた。

## 存在を教えるための触り

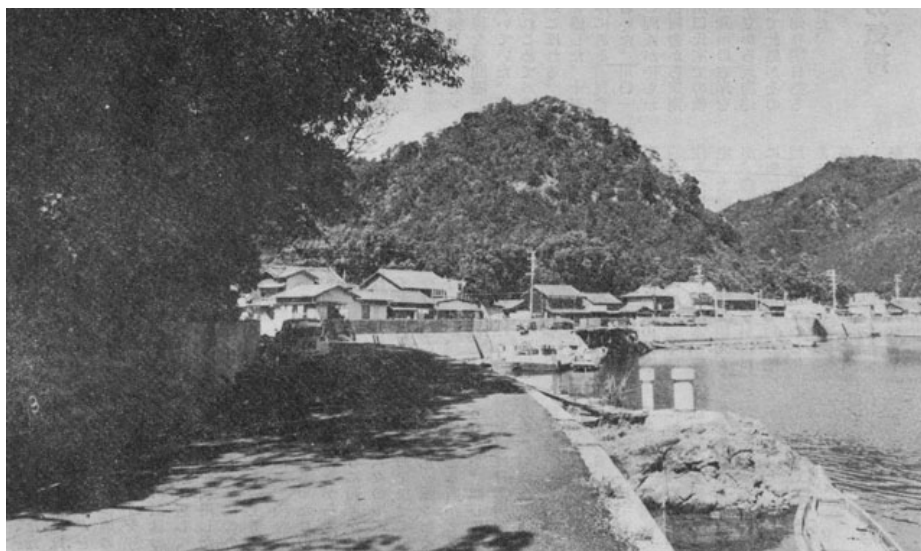
私達の肉体を生かしている根本的な自然の力を固有霊と称している。私達に喜怒哀楽があるように、肉体が土に帰ったあと残った固有霊には、何千年たっても肉体をもっていた時のような感情の働きがある。

神を祀り神を拜むという日本人の信仰は、古くから習慣づけられた固有霊に対する土着信仰の流れである。固有霊を祀り信仰するということを解り易く言えば、古い古い姿の亡き有能な固有霊と私達が、家族の如く親しく交わりを結ぶということである。従って人間が日々生活している如く、その霊体に対しても、生きている人と同じように扱い、礼を以って仕えることが必要である。

先祖と子孫の関係も同じだが、霊界人と現界人は相互扶助の形に「加美」が仕組んでおいたため、この関係が不調和であれば、固有霊は、その関係深い人々に勧告の意味で、その家庭やその人相応に何かの触り(霊障)を示す。

日置に住む人々と神奈備山、及び、月宮神社は何千年前から縁りがある。特に神社の右にある岩床のあたりは常に清浄にし、毎日一度は必ずご挨拶に詣るように力説しておいた。

(日聖記)



(写真説明) 日置神奈備と月宮の杜

和歌山県西牟婁郡日置川町(現在は白浜町)日置にある。正面は神奈備、右前は日置川、左の杜は月宮神社でそこは太古の禊、祭祀場であった。道路がその岩床を切断している。(日聖写す)

神奈備信仰の古き祭祀形態  
 原始の頃の人々にとつては、神奈備は神そのものであったので、水垣の内は神聖な禁足地であった。それが人文の流れや時代と共にその性格が変化

した。彼等は神奈備に棲まう固有霊の存在を感知するようになったので、この辺りから実生活に役立つ霊示を仰ぐため、自然神崇拜から人格神信仰に移ってゆく。

固有霊は神奈備のどこかに拠点がある。人々は水垣を超えて適当な場所に磐座を造り、人間生活に必要とする総てを供えて祭祀し霊示を受けた。

我が国のような細長い島国に住居する古代人は、山麓、平野、海岸、島嶼等で、それに相応した生活環境を自ら造っていた。従つて神奈備信仰の形態もその地区によってそれぞれ特異性があつたようである。

日置神奈備は、日置川と海の接点にあつて、龍田の三室山神奈備と同型の要素をもっている。

前号掲載の高嶋(※岡山県の児島湾の島)に在る神奈備は、内海を生活の場とした古代人のご神体であつた。彼等は日夜、大海原から浜辺や遙か遠くにかすむ峰々の山並みを眺めて、そこから受ける靈感によつて神祀りも行ったようである。高嶋では山麓・中腹・頂上の三ヶ所で行つた古代祭祀遺蹟がある。おそらく海の神を辺津に、川野の神を中津に、総司の山神を頂上の奥津に鎮まりますと見立てて祭祀を行った。

元来、農耕文化を生み出した大和地方の神奈備には三段式祭祀形態は無かつたと思うが、美和を軸として生活圏を形成した古代人は、三輪山でこの新祭祀の方法を取り入れた。(日聖記)

### 熱気こもる雰囲気 紀州教導行わる

夏の暑さがかすかに残る九月中旬、顕幽にわたる紀州教導が行われた。九月十六日大倭を出発、太平洋の黒いうねりを右に眺めながら紀州路を南下、夕刻、楠本正子さん(大阪市都島区)の生まれ故郷、日置川町に到着し、その夜早速教導が行われた。

### 日置教導

日置は海岸線の美しい町である。楠本正子さんの実家、川口良夫さん宅はこの景勝の地、日置川町の中心部にある。ぜひ、日置で教導をとというのが楠本さんの願ひであつたが、ようやく九月十六日実現するところとなつた。

午後八時より川口良夫さん宅が会場に当てられ教導が行われた。集まつた人達からは、この際にとつて色々の質問が飛び出したが、法主様はその一つ一つに答えられながら、宗教の基本について話をされた。

とくに「差別感、劣等感をとつて自然の心にそえる人間になるように」という意味のことを強調された。質問には「人間は死んでも魂が残るのか」というのがあつたが、法主様は、幽界の説明をされたあと「神(※加美自然神)と固有霊とは違う」という意味の話をした。これまで多くの人達は固有霊を神さんとしてきただけに、肩すかしのような話にとまどうむきもあつたようである。明けて十七日は月宮神社に参拝。法主様によるとこの神社は、もとは神奈備の拝所であつたという。どこへ行つても、神奈備と古代の信仰が結びついていることに一同感動。しかし大抵、神社だ

けが残って神奈備が忘れられているのはどうしたことかと、ここでも思った次第であった。

十七日の午後は、田谷圭造さんと森田君枝さん宅で個人相談を中心とした教導が行われた。前夜、川口さん宅で顔馴染になっていたので雰囲気もなごやかに行われたが、個人相談だけに深刻なものも多く熱のこもった教導であった。

十八日は川口良夫さんの長男一夫さんの案内で、昔、碧があったという弓矢八幡社の宮山に登ったあと、日置の町と別れ紀州路を北上、和歌山に向かった。

## 和歌山教導

和歌山教導の会場は和歌山市島崎寺町六丁目(当時)の和坂隆雄さん宅が当てられた。大倭と和坂さんとの結びつきは長いが、教導が行われたのはこれからはじめてである。

十八日夕刻、和歌山に到着。午後七時三十分頃より教導ははじまったが、出席された方は、ほと

んど教育者と宗教関係の方達ばかり。質問の方も、哲学的内容を含んだものが多かったようである。

法主様は「神のまにまに」というのは、ただ観念的な言葉ではないと前置きされて、一つ一つこれまで辿ってこられた例を引きながら説明された。現場で実際に体験しておられる方が多いだけに熱心な雰囲気であった。

\*

こうして日置と和歌山の教導は熱のこもった雰囲気のうちに行われた。地方教導を済ましていつも感じることは、これまで点のつながりでしかなかったのが、こうした教導によって目に見えぬ線のつながりになってきているということである。多くの仲間のできることは本当に嬉しいことである。

最後にこの教導でお世話下さった多くの方々に厚くお礼申し上げます。(※署名はないが、同行した柴地則之さん記と思われる)

鹿兄島屋久島

## 戦争と死と慰霊 — ななおとニシキトベを想いながら — 手塚賢至

### ◆ ななおさかきという詩人

6月21日の朝日新聞の一面、鷺田清一さんが毎日連載される『折々のことば』に「ななおさかき」の名前と詩句を見つけて思わず小躍りした。

もし世界が あるならば

その 片隅から磨くとしよう

もし永遠が あるならば

いつもの 一瞬を

輝かすとしよう

すぐに元本の、没後に編まれた新詩集『ココペリの足あと』(思潮社)にあたって詩の全文を読んだ。

鷺田さんの紹介には、へ世界を放浪し、行く先々でビート詩人たちと詩会を開き、コミュニオンをつくって山河を護る活動をおこなった詩人は、晩年、こう詠った。「使えば つかうほど 今日の空に 近づく 瑠璃色の 雑巾になろう」と。もしまだ世界があれば、あり続けていれば、との祈りと共に。

ななおさかき(1923~2008。本名、柳七夫。以下、「ななお」と表記)は私の大好きな詩人である。現代詩を代表すると付け加えるにふさわしい詩人と思っているが、いったいこの詩人をどれだけの人がご存知だろうか。私には身近な存在なのだが、あまりにも一般的な社会通念からはみ出して権威から遠く、ビートで、ヒッピーで、パンクでありながら真摯な日本の言葉・文学の継承者であるこの人には一概な解説を寄せ付けない大きさがある。

幸い『ココペリの足あと』には、ななおの親友で現代アメリカの代表詩人でもあるゲイリー・スナイダー氏が「未来に発信する古代のビジョン」と題する一文を寄せられ、冒頭に人物像の輪郭があるので一部を引用する。

へななおさかきという名前は、世界中の文学的中心地で良く知られている。自由で大胆な魂をもつユニークな放浪者、時には山河を守る活動家、歌い手謡い手、そして国際的に作品が出版されている詩人、と多岐にわたっている。だがこういった肩書は、ななおがもつ判りやすいが当たり障りのない表面上のイメージに過ぎない。この、日焼けして引き締まった身体の持ち主は、軍国教育盛んな第二次世界大戦前の日本から、第二次大戦中(ななおはレーダーの暗号分析の仕事をした)、そして戦後の貧困、そこからゆっくりと脱出する過程の日本を経て、更には最近の経済大国、同時に環境破壊ゴジラとしての日本、そのいずれをも経験している。

つまり、思春期に軍国主義の中で戦争と向き合い、悲惨で多大な犠牲を体験して後々の復興と経済成長、それに伴う国土の自然破壊と荒廃を五体と感性に刻み、多くの死者と国土の美しい自然が

破壊される跡あとを、二本の足で踏み確かめながら深い感性と抒情で表現した。  
 そして狭い日本に収まらぬコスモポリタンな人柄と眼差しは、常に世界に開かれ共鳴していた詩人と言えるとと思う。

実は、ななお(写真上の右)は私の遠縁者でもある。郷里は隣町だ。初対面時に(近鉄学園前駅の近くの八百屋の「ろ」で)挨拶すると出身地を尋ねられ、鹿児島島の北薩、宮之城と告げると即座に「それなら私の親戚だ」。実家の父に問うと、その神七夫さんは確かにと。

以降、ななおとは何回か会う機会があったが、おざなりだった。今更ながらもっとたくさんのごことを聞いて、ななおの魂にもっと触れておきたかったと悔やむ。

8月は陽炎の中に戦争とその犠牲となった死者を慰霊する月。私は8月帰省の折にななお所縁の地、出水市を訪ねた。出生地東郷(現、薩摩川内市)より北に連なる紫尾山系を越えると有明海に面した出水平野が広がる。かつて、太平洋戦争時に海軍の航空隊基地があり、ここで23歳のななおは終戦を迎えている。

多くの神風特攻隊兵士が飛び立っていった戦史に残るこの飛行場跡地には、今では幾つもの石碑が立つ小さな特攻隊公園がある。中に「出水基地発進特攻隊員」の名前が刻まれた石碑があった(写真上の左)。ここから飛び立っていった若い兵士たち(はじめ犠牲者の死に)に祈りを捧げる。過酷な任命を受けて短い命を潰えた人々たち。私は一人一人の名前を指でなぞりながら人名を唱えていく。と、最後の人名の末尾にこう記してあって啾然とした——氏名不詳百余名(写真下)。

名前さえ記録されていない、「個人」が抹殺されたこれほど多くの人がいることに驚き、胸が塞いでしばらく動けない。名前さえ消失されている一人の人間としての尊厳と命へのあまりの無惨な軽視。ななおはどんな想いで死地に飛び立つ彼らを見送っていたのだろうか。



### ◆ニシキトベの言葉が蘇った

昨年10月の大倭文化行事、熊野への「丹敷戸畔(ニシキトベ)」の慰霊の旅となった杉本順一さんの報告が12月号の本紙に載った。今のお気持ちをお問われた丹敷戸畔の言葉は衝撃だった。

出水市の特攻基地跡で、その言葉がにわかに蘇ってきた。

「トベノミニナツテミナサレ イトイタキモノ  
 ニテ ワレミヲモチテ コレホドノ イタキヲシ

ラズ ココロウシナウナリ タマシイニ モドリ  
 テ ソノクノミ ノコリシモノナリ  
 ワレヲイタワリタマウナレバ ミノクルシミヲ  
 トクココロモチテ コラレヨ」  
 哀切極まるトベの痛みと心情と願いが時空を超えて生身に突き刺さる。

これこそが戦争の実相ではないか。トベたちの戦はいかばかりであったか、勝者も敗者も、負けるも勝つも一人一人の死。遠征してきた神武の側も「屍の道」であったと言う。

初戦で手負う兄のイツセノミコトを失い、海路南の紀伊、熊野からトベたちとの交戦の末に鳥見谷でのナガソネヒコ軍との決戦に臨んだ時に、金色の鶏の出現と和議——が私の知るところだが、遡れる日本史最古の史書とされる『日本書紀』『古事記』に残る記述を読めば、戦いと闘争、覇権の連続だ。

そこにもおびただしい死者の群れ、一人一人の個の苦しみと悲しみが渦巻いていて哀切だ。これが人間の宿業、捨て去ることのできない本性であると認めてそれを飲み込むしかないのか。しかし肉体は滅びても想いと念は消え去らない。

とすれば苦しみを和らげるための慰撫こそが現世に生きる者のせめてもの手向けとなろう。

国津神と天津神の争い、国の生まれ、成り立ちからしてこうであるから怨念、憎しみは早々に消え去ることなく、後に連綿と続いていくのであるうか。二千年を経ても消えぬ心の叫び、丹敷戸畔の悲痛な声は心して聞かねばなるまい。

トベについては津名道代さんの心打つ『トベ達の悲歌 日本「国つ神」情念史3』(文理閣)に詳しい。丹敷戸畔をはじめ津名さん特有の感性が躍

動して、歴史の深層に底光りしている隠れた声  
が、独自の『史耳』で聞き取とられ現代に蘇生し  
てくる。歴史文献、民俗、伝承を確かな地場から  
深く掘り下げて、地鳴りのごとく響きあひ不思議  
な余韻を醸す稀代の著作群だ。

杉本さんへ届いたメッセージにしても、記紀な  
どの限られた歴史書、資料では掬い取れない貴重  
な証言として、アカデミックな史学からだけでは  
今一つ実像として見え難い、こうした魂の声から  
の学びも必要だろう。

神話と歴史を跨ぎながら、記紀に言う大和朝廷  
の発端から抗争の連続である。これが尾を引き今  
に至るとすれば、歴史の連続性を謙虚に悟り、事  
実を直視して捏造やフェイクに惑わされぬよう、  
とらわれを排して正しく学ぶことの大切さこそ尊  
重したい。

### ◆瑠璃色の雑巾になろう

人類史はとどめ無き争いの歴史。人はなぜ憎し  
み合い、殺し合うのか。何に起因して、愛情と憎  
悪を共に抱え持ち殺戮しあうのか、人間の克服で  
きない難題をいかに解決できるのだろうか。人間  
は差別、暴力、戦争から逃れられないとすれば暗  
澹たる氣に陥る。

世界中で昔も今も、国家や民族の独尊を主張し  
ながら争いが正当化され、差別と暴力の連鎖が連  
綿と続き、いまも各地で戦火の絶える日は無く、  
火種はくすぶる。

戦争は修羅で、狂気で、地獄絵である。人が人  
を殺す、人が人に殺される。個人の尊厳を排し、  
人間性を圧殺しなければならぬのが戦争の実  
態。

特攻を成し遂げたその場の、相手方にも特攻機  
もろとも潰えた同世代の若者の兵士もいただろ

う。突撃する特攻機におびえながら、彼も母の名  
を呼んだかもしれない。その個人にも国には両親  
や家族、妻や子供や友もいて彼の帰りを待って  
いたに違いない。勝者も敗者も死者は皆無言だ。

戦場も銃後も、兵士も民間人もおびたしい人  
たちが苦しみ無残な死を遂げた。戦争の記憶が精  
神を蝕む、様々な局面の体験による戦争後遺症  
(PTSD)の深刻さも果てしない。(殺し殺さ  
れあう)戦場から戻ってもその傷はいやされず、  
(良心あればこそ)その苦しみは自死にも至るほ  
どに深く深い。人間が人間である限りおそらくそ  
れは克服することはできないだろう。人は人を殺  
すことの罪の意識から逃れることのできぬ、なん  
という辛さであろうか。

何時までこんな愚かなことを繰り返すのか。存  
在善であるべき人が、人であることを強制的に奪  
われ、憎悪と殺戮の修羅場が正当化されるなら、  
行き着く先は滅亡しかないではないか。

今年も8月15日戦没者追悼の式典が催された。  
「今日の繁栄は尊い犠牲の上に築かれ」、「敬意と  
感謝の意を捧げ」、「戦争の惨禍を二度と繰り返  
さない」とは言うが、果たしてそれは戦争で犠牲に  
なった全ての人々、一人ひとり個々の声と、その  
辛さに向き合い、無念の内に死者が何を未来へ望  
み託したかに虚心なく真心からそれに添うもので  
あるかどうか。今を生きる私たちに死者は問うて  
いる。

戦争の病理から人類の生存を救うべく、理想を  
謳う切実な美しさを温めた憲法九条を抱く我が国  
においてさえも、軍事予算と兵力は増加の一途だ。  
美しいとは儂いものではない。強く真善美は一体  
である。平和を希求して未来を描くことこそが死  
者への手向けとなろう。

人間は善と悪の葛藤のはざままで愛情と憎悪を兼  
ね備えた愚かで間違う動物であることを自覚し、  
その事実謙虚に向き合い、殺し殺される関係を  
退け、いかに融和な関係を築くかに叡智を捧げる  
しかない。

知人の霊長類学者・山極寿一さんからこんな話  
を聞いたことがある。ゴリラとヒトとを比べてゴ  
リラは乾いた怒り、ヒトは湿った怒りを持っている  
と。ヒトの怒りは消し難くいつまでもくすぶり、  
ゴリラは怒りを長引かせず、争いが起こりそうに  
なると和議と調停を行うと。

そしてヒトの特性として、他者に(森羅万象、  
自然物にも)共感でき、想いをいたすことができる  
力を持っている。この能力こそが長い進化の過  
程で生み出されたヒトがヒトとして存在し得る、  
人間の持つわずかな救い、希望ではないか。

怒りは憎悪を生み、新たな争いを再生産して終  
わりなき負の循環に墮ちる。和の光こそ今と過去  
の時空に、顕幽の世界に満ちてほしい。

この夏、空高く青く広がる出水平野の特攻兵士  
の名が刻まれた碑の前で、個人と国家、戦争と平  
和、鎮魂と慰霊が幾重にも心を巡った。

「折々のことば」に紹介された詩句の前節には  
次の3行が挟まれている。

おのれを 汚して 窓ガラスを  
台所を 便所を 拭き上げよう

また 差別を 戦争を 拭きとばそう  
瑠璃色の雑巾に託すななおの心意気が清々し  
い。

そうだ、そうなのだ。日々、日常の中で身近な  
片隅から拭き拭き磨いていくしかない。瑠璃色の  
雑巾、そういう物(者)に私もなりたいたい。

# 寸 莎

第142回

大倉 弘さん  
おおくら ひろし



## 河内の魂、盆踊り

「ワイは、生まれも育ちも河内の人間で、人呼んで河内弁太郎と言われたのは高校生の頃や。『おんどれ、何さらしとんのんじゃ(お前、何をしてるのや)』。テレビの影響か、今ではこんな河内弁も使わんようになったけど、日常の言葉やったんや。」

盆踊りで音頭を取るのが好きでなあ。十八番は源頼光が鬼退治をする物語『大江山鬼人退治』や。両親は仲が良くて優しくったけど、一回だけ将来歌手になる言うたら親父に怒られました。小学校の時から盆踊りの櫓の下で、一生懸命朝の3時頃まで音頭取るのを見てたなあ。ええなあ、あんなやりたいな。20歳の時にとび入りで音頭取らしてもらった事もあって、「お前、素質あるがな、やれや」そんな事言うてくれたもんやから一生懸命になって、挙句の果てに

音頭取りになってしもたんですわ」

大倉弘さんは「浮音家」社中のお師匠さん。毎年日聖祭の後で催される直会演芸会で取りをとって下さり江州音頭や河内音頭で弥栄に場を盛り上げ場をしめて下さるのが恒例だ。「仏像も彫ります。7年程、都島の仏師水戸岡先生に学び、150年ぶりに町内のだんじりに彫刻を施して復活させたり、仏像をお寺に寄贈させて頂いた事もありましたなあ。目を入れる時が一番難しい。」

「聖徳太子を彫らしてもらいますわ」。ひろ枝と結婚した当初(弘さん53歳)、二人で一緒に、瑞光院で法主さんと話してた時にお太子さんの話しがでて、思わずそう言うて出たのが、拝殿正面祭壇の聖徳太子像ですわ。毎日まいにち、法主さんや大倭の事を念いながら彫りましたで。何とか喜んでもらおうと思いついてね。出来上がった像を持って行

ったら、法主さんご夫妻は丁度ご飯時で、ほんまに嬉しそうに太子像を抱いて撫でてね、箸でご飯つまんでお太子さんにお食い初めするようなしぐさをされた姿は忘れませんな。いつ訪ねて行っても嫌な顔一つせず迎えて頂きました」

先妻との間に生まれた長女で、お琴の名手佐和子さんの生徒であったひろ枝さんのご縁で、弘さんは大倭を知る事になる。「ひろ枝との結婚式も法主さんご夫妻に仲人をお願いして、大倭神宮で親族そろって挙げさせて頂きました。今考えたら、何も大倭の事知らなかったから、こんなお願いも出来たんやと思いますわ」弘さん(79歳)は昭和15年10月、大阪府北河内郡庭窪町梶(現在の守口市)に農家の4人兄弟の長男として誕生。何よりも歌が好きで活発な少年だった。

6歳の時、すぐ下の妹明美さんが結核に罹り、弘さんは2年間親戚に預けられた。「夕方になったら毎日淀川の川向うにある実家の方向いて、帰りたいなあ。寂しかったですわ」

昭和20年3月明美さん帰幽。「最後に桃谷の通信病院に見舞いに行つた時は大阪大空襲の翌日で、町が焼けて燻ってたのを今でも鮮明に憶えています」。8月、終戦。

時は過ぎ、府立淀川工業高校を卒

業した弘さんは、給排水冷暖房の会社に就職。5年勤務して独立、「大倉水道」を立ち上げた。28歳で社員20人を抱えて株式会社にする。「そら頑張りましたで。年に3日も休んだかなあ。丁度大阪一帯が拓けてきた時分で、住宅ブームに乗れたんですわ。渡り職人も多かったから使うのは難しかった」

この間、23歳の時に幼馴染で1つ年下、しっかり者の賀子さんと結婚(49歳帰幽)、3人の娘を授かった。10年して仕事を社員に任せられるようになり、本格的に桜川小房師匠について音頭の修業を始めた。「厳しかったですよ。一節一節出来るまで1年かかりました」。3年ついて今度は江州音頭の本場、滋賀県の師匠に学び42歳で独立。錦志廻家を名乗る。河内音頭は南河内の泉州で太鼓を1年半学び、浮音家に改名。

「音頭をやつてきてほんまによかったと思う。色んな所に呼ばれて行くから、友達も沢山できましたし稽古も毎週あります。そうそう最近孫(前回寸莎の米澤有宏さん)がなかなか上手い事やりましたわ」

今後の課題は後継者を見つける事。音頭を始めて40年。弘さんの体にはいつとも、河内のリズムが流れているのだ。(聞き手 李章根)

# あじさい日誌

9月10日 紫陽花邑の出入口口である須賀の道の坂下の路面標示ラインが塗り直されました。



9月14日 大本宮拝殿正面の祭壇の菰が新しくされました。

9月15日 大倭神宮月次祭。

9月23日 大倭大本宮月次祭。

気になっていた台風10号がはずれ無事に行えました。祭典後、昭和41年9月23日の月次祭法話をお聞きしました。この日発行の9月号『おおやまと』に掲載された「幸せはどこにあるのか―本当の意味で自分を愛するとは―」の元の録音でした。

10月3日 午後6時から大倭会館で大倭町自治会の役員会。

10月6日 大倭神宮月次祭。

夜、大倭会館で邑倭の会。

大倭安宿苑では

10月6日 今年度2回目の新入

職員対象の人事考課研修。

(菅原園)

9月11日 車椅子清掃のボランティアさんに20台程の車椅子をきれいにして頂きました。

(須加宮寮)

10月1日 旧須加宮寮周辺の地域清掃に参加者11名。

(長曾根寮)

9月21日(特養) 敬老の日。住苑者・シヨートステイの皆さん記念撮影をして掲示しました。

9月24日(デイ) かき氷作り。

(茂毛路園)

9月25日 定例懇談会に7名が参加。10月より完全予約制で面会を再開するという施設長の話がありました。

(八重垣園)

9月22日 おやつにかき氷を食べべて「何年振りやろ」と笑顔。

## こぼれずみ

自分の体感と仮想世界

神奈川県藤沢市 伊藤裕司

最近、人工知能関連の企業に知的財産担当として転職した。人工知能の分野では、日本語での質問に自動で回答したり、人物動画の顔も別人にできたりとか、技術がどんどん進んでいる。映像で誰かが話していたり、誰かが書いた文章があっても、本当にその人が話しているのか、人工知能が出力しているのか、なかなか識別困難である。結局、発信元はどんな人なのか

# あんない

\*月次祭(大倭神宮)

11月6日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

\*大倭会主催視会

11月8日(日) 中止とします。

\*月次祭(大倭神宮)

11月15日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

\*月次祭(大倭大本宮)

11月23日(祝) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

なあと思うしかないのだけれど。仕事でもリモートワークやネットワーク経由の会議が増えて、パソコンの画面では何度も会って話しているも、対面で会ってみると「この人が〇〇さんだったのか」と驚くこともある。やっぱり自分として感じることは大事にしたいなあと思う。

便利なツールはありがたい。しかし同時に、歩く時の足裏や街の香りとかが、体を感じることは大切なことに思う。

通勤電車の中など、スマートフォンに長時間へばりついているのは、自分の気分がイマイチいけない時が多いように気付いた。まあ、早く対応したいメールとかある時もあるけどね。

自分の気分がスツキリ、クリアに、前向きであるようにいつも心がけていたいと思う。

# 編集後記

▼9月号神通力如是(第九回)

について。序文に「今回の原文の紹介は(中略)奇稲田姫命からの「御神託」によるもの」と前置きがあります。

それを受けて原文を読み始めたのですが、奇稲田姫命の名はどこにも見当たりません。ハテ? と首をひねりつつ。註釈④まで読み進めたところ、どうやら「皇祖」が奇稲田姫命を指すらしい。

ここからまた原文に戻って「皇祖」と書かれた箇所を探してみますと、「奇稲田姫命からの「御神託」という序文の意味がようやく理解できます。

頭から順に読んでしまうとわかるよう、解説文中に補足があれればよかったと思います。原文を解釈するにあたって、ここは通説をひっくり返す、びっくり仰天のポイントです。

ちなみに、第三回と第五回では、早々に「皇祖」奇稲田姫命と親切に明記してあったりしますが、紙幅の制約もあるかと思いますが、個人的にとても楽しんでいます。

は、早々に「皇祖」奇稲田姫命と親切に明記してあったりしますが、紙幅の制約もあるかと思いますが、個人的にとても楽しんでいます。

は、早々に「皇祖」奇稲田姫命と親切に明記してあったりしますが、紙幅の制約もあるかと思いますが、個人的にとても楽しんでいます。

は、早々に「皇祖」奇稲田姫命と親切に明記してあったりしますが、紙幅の制約もあるかと思いますが、個人的にとても楽しんでいます。

は、早々に「皇祖」奇稲田姫命と親切に明記してあったりしますが、紙幅の制約もあるかと思いますが、個人的にとても楽しんでいます。

は、早々に「皇祖」奇稲田姫命と親切に明記してあったりしますが、紙幅の制約もあるかと思いますが、個人的にとても楽しんでいます。

は、早々に「皇祖」奇稲田姫命と親切に明記してあったりしますが、紙幅の制約もあるかと思いますが、個人的にとても楽しんでいます。

は、早々に「皇祖」奇稲田姫命と親切に明記してあったりしますが、紙幅の制約もあるかと思いますが、個人的にとても楽しんでいます。

は、早々に「皇祖」奇稲田姫命と親切に明記してあったりしますが、紙幅の制約もあるかと思いますが、個人的にとても楽しんでいます。

は、早々に「皇祖」奇稲田姫命と親切に明記してあったりしますが、紙幅の制約もあるかと思いますが、個人的にとても楽しんでいます。

は、早々に「皇祖」奇稲田姫命と親切に明記してあったりしますが、紙幅の制約もあるかと思いますが、個人的にとても楽しんでいます。

は、早々に「皇祖」奇稲田姫命と親切に明記してあったりしますが、紙幅の制約もあるかと思いますが、個人的にとても楽しんでいます。

普通には理解しにくいですが、その奇稲田姫さんが、九州の大王子に「東に来て国を治めよ」となぜ神託を下したのか。長曾根彦彦さんが、極めて平和的に国を治めていたのではないだろうか。まあ、すべては神意による「神ながら」と言ってしまうおぼしきかもしれません。

金鶏なのか光なのかわかりませんが、最初から武器を取って和解させるようには出来なかったのか。五瀬命など歴史に名の残った人だけではなく、実に多くの人たちが戦って亡くなっているだろうし、しかも九州から一緒に来た吾平津姫さんや、みんなの心を一つにするためと自害した長曾根彦彦さんが、何だかわいそうでなりません。(歎)

▼国内男性最高齢は上田幹蔵さん(110歳・奈良市)になったという報道がありました。

上田さんは森彦という号で、平成19年1月号(97歳)と平成22年12月号(100歳)の間、俳句の風物としてその季節の有名な句の寸評と自分の句を、毎月、『おおやまと』紙に寄せてくれた方です。

▼97歳)草の香に仔鹿は親を離れ初め/98歳)軒先で日々黒ずむ吊るし柿/99歳)新緑の路地深くうして人気なき/100歳)ポストの喉まで手を添えて春になればという手紙(自由律)

▼97歳)草の香に仔鹿は親を離れ初め/98歳)軒先で日々黒ずむ吊るし柿/99歳)新緑の路地深くうして人気なき/100歳)ポストの喉まで手を添えて春になればという手紙(自由律)

▼97歳)草の香に仔鹿は親を離れ初め/98歳)軒先で日々黒ずむ吊るし柿/99歳)新緑の路地深くうして人気なき/100歳)ポストの喉まで手を添えて春になればという手紙(自由律)

▼97歳)草の香に仔鹿は親を離れ初め/98歳)軒先で日々黒ずむ吊るし柿/99歳)新緑の路地深くうして人気なき/100歳)ポストの喉まで手を添えて春になればという手紙(自由律)

▼97歳)草の香に仔鹿は親を離れ初め/98歳)軒先で日々黒ずむ吊るし柿/99歳)新緑の路地深くうして人気なき/100歳)ポストの喉まで手を添えて春になればという手紙(自由律)

▼97歳)草の香に仔鹿は親を離れ初め/98歳)軒先で日々黒ずむ吊るし柿/99歳)新緑の路地深くうして人気なき/100歳)ポストの喉まで手を添えて春になればという手紙(自由律)

▼97歳)草の香に仔鹿は親を離れ初め/98歳)軒先で日々黒ずむ吊るし柿/99歳)新緑の路地深くうして人気なき/100歳)ポストの喉まで手を添えて春になればという手紙(自由律)

▼97歳)草の香に仔鹿は親を離れ初め/98歳)軒先で日々黒ずむ吊るし柿/99歳)新緑の路地深くうして人気なき/100歳)ポストの喉まで手を添えて春になればという手紙(自由律)

▼97歳)草の香に仔鹿は親を離れ初め/98歳)軒先で日々黒ずむ吊るし柿/99歳)新緑の路地深くうして人気なき/100歳)ポストの喉まで手を添えて春になればという手紙(自由律)

▼97歳)草の香に仔鹿は親を離れ初め/98歳)軒先で日々黒ずむ吊るし柿/99歳)新緑の路地深くうして人気なき/100歳)ポストの喉まで手を添えて春になればという手紙(自由律)

▼97歳)草の香に仔鹿は親を離れ初め/98歳)軒先で日々黒ずむ吊るし柿/99歳)新緑の路地深くうして人気なき/100歳)ポストの喉まで手を添えて春になればという手紙(自由律)

▼97歳)草の香に仔鹿は親を離れ初め/98歳)軒先で日々黒ずむ吊るし柿/99歳)新緑の路地深くうして人気なき/100歳)ポストの喉まで手を添えて春になればという手紙(自由律)

▼97歳)草の香に仔鹿は親を離れ初め/98歳)軒先で日々黒ずむ吊るし柿/99歳)新緑の路地深くうして人気なき/100歳)ポストの喉まで手を添えて春になればという手紙(自由律)

▼97歳)草の香に仔鹿は親を離れ初め/98歳)軒先で日々黒ずむ吊るし柿/99歳)新緑の路地深くうして人気なき/100歳)ポストの喉まで手を添えて春になればという手紙(自由律)